

インドネシア写本国際シンポジウム

菅原由美

2004年7月26日～28日に、インドネシア国立イスラーム大学ジャカルタ校(Universitas Islam Negeri Syarif Hidayatullah:UIN)キャンパスで、同校と東京外国語大学 21世紀COEプログラム史資料ハブ地域文化研究拠点(C-DATS)及びインドネシア写本学会(Masyarakat Pernaskahan Nusantara:MANASSA)の共催で、インドネシア写本国際シンポジウムを開催した。発表者は、欧米、中東、日本、マレーシア及びインドネシア国内から、写本研究を専門とする文献学者(philologist)及び、写本を資料として利用した経験のある歴史学、宗教学、言語学、文学、考古学、人類学などの研究者27名によって構成され、各々のディシプリンにおける写本の利用法、文献学との比較、最新の研究成果などの発表がなされた。インドネシアでは、1996年より文献学者によって構成されるインドネシア写本学会によって毎年インドネシア各地で写本国際シンポジウムがおこなわれており、本シンポジウムはその第7回目にあたるが、今回は他の共催二団体側の要望により、文献学以外のディシプリンによる研究のセッションを組み、写本利用法の再検討とディシプリンの異なる研究者間の対話を試みた。これは、当地では特に写本を使う研究者＝文献学者、オランダ語史料を使う研究者＝歴史学者という住み分けができており、共同で研究をおこなったり、学際的な議論の場を設けたりすることが稀であることから、提案された試みであった。

まず、現UIN学長であり、インドネシア・イスラ

ーム史研究者であるアズマルディ・アズラ(Azyumardi Azra)が、シンポジウムの基調報告で、インドネシアのイスラーム研究においてこれまであまり省みられてこなかった写本資料研究の重要性を語るとともに、いまだ民間の手にあり、放置されている数多くの写本の保存の必要性に対する社会的認識の欠如を訴えた。報告では、まず歴史学から、リックレフス(M.C. Ricklefs、メルボルン大学)が写本の種別にどのような歴史史料になりうるかという発表をおこない、考古学からは、ウカ・チャンドラサスミタ(Uka Tjandrasasmita、UIN)が、文化人類学からはジャムハリ(Jamhari、UIN)が、インドネシアにおける文献学とそれぞれの専門のディシプリンとの関係について発表をおこなった。宗教学のセッションでは、青山亨(東京外国語大学)が、複数のテキストが混在する写本から、そのテキストが書き写された時代の読者の視点を分析した。言語学のセッションでは、ペーター・リデル(Peter G.Riddel、プルネイ大学)(ただし彼は当日会議に出席することができず、論文が報告されたのみ)が、17世紀の宗教書写本(キターブ)のマレー語と現代版コーラン解説に用いられるインドネシア語の比較分析をおこなった。文献学側からはシャンベル・ロワール(Henri Chambert-Loir、フランス極東学院 EFEO)が、これまで出版された写本カタログを用いて、ジャワ語写本に見られるコロフォン(Colophon、「奥付」)の比較分析をおこなった。

また、新たな写本調査の結果も発表された。ウ

リ・コゾック(Uli Kozok、ハワイ大学)は、近年クリンチ(ジャンピ)で彼が発見した最古のマレー文書(14世紀)の分析結果について¹、その文書の所有者からの説明を交えて報告した。また、現在、東京外国語大学と共同調査をすすめているパダンのアンダラス大学グループが、このほど発見されたインドラプラ(Indrapura)王国の系譜についての報告をおこない、王族の子孫の発言と伝統儀礼のビデオ上映をおこなった(系譜は会場に展示され、インドネシア全国紙 *Republika* 及び *Media Indonesia* に関連記事が掲載された)。エドウィン・ウィリンハ(Edwin Wieringa、University of Cologne)は、ライデン大学に新たに寄贈された個人コレクションからオランダ植民地当局の写本担当官の資料について報告をおこなった。

写本の保存とマルチメディアの利用の可能性についてのセッションでは、東京外国語大学 21世紀 COE(C-DATS)側が、現在進行中の電子図書館プロジェクト(Dilins)とその一部をなすパレンバン及びミナンカバウ地域の写本デジタル化プログラムについての説明をおこない²、次にソロのヤヤサン・サストラ(Yayasan Sastra)が現在試験運行中であるジャワ古文書デジタルサイトの紹介をおこなった³。当該サイトでは、相当数のジャワ語古文書コレクションがローマ字翻字され、

データベース化されており、全文検索が可能となっている上に、ジャワ文字で書かれている写本のオリジナルについても画像で見ることが可能であるとの説明がなされた。会場からは、写本のデジタル化について、デジタル化完了後に、写本の背景や写本そのものがおろそかにされる危険性が指摘されるなど批判的な意見も見られたが、写本研究推進のために国内外の協力体制の重要性が再認識されていた。

本シンポジウムは、当地では異色の試みであったにも関わらず、各地からの出席者で盛況であった。が、比較的高齢の研究者が多く、文献学の後継者問題が深刻にも見えた。その一方で、地方分権化との関わりで地方が独自の文化に再注目する傾向が生じており、写本もそうした独自の歴史と文化を象徴するものとして捉えられ始めていた。同時開催された写本学会総会で、次期国際シンポジウムはスラウェシ島南部にあるブトン島にて開催されることが決定されたが、これはブトン住民が旧ブトン王国の写本コレクションを復興に生かそうとしている動きの現われであると思われる。

なお、本シンポジウムの成果は2005年度にインドネシアにて出版をおこなう予定である。

¹ <http://www.hawaii.edu/indolang/surat/naskah/tanjung/> に文書の写真及び内容掲載。

² http://www.dilins.c-dats.tufs.ac.jp/about_dilins/jakarta_sympo_040727.files/frame.htm

パレンバン写本カタログは今年度中に、ミナンカバウ写本については来年度に出版予定。最新情報は <http://www.tufs.ac.jp/21coe/area/index-j.html> に順次掲載していく予定。

³ <http://www.sastra.org> (利用者制限あり)